

理學、音樂、舞蹈、繪畫等の教科を受けしめたり、當時夫人が如何に喜んで此等の學科を學びたるか夫人の教師亦如何に喜んでそを夫人に教授したるか而して夫人が如何に驚くべき進歩をなしたるかは、今云ふを要せず蓋し自ら讀者の了解するに難からざることなるべければなり。

夫人の殊に愛讀せられたるはタツソー、トムソン、フエチロン及びブルタークの著書なり、就中最も深き感化を興へしはブルタークの著書なるべし後年夫人が懷抱せし感情及び政見は多く此書に胚胎したらんが如し

斯くの如く精神上非常の天才を有する夫人は、身體上亦諸種の美點を有したり、夫人長身にして細腰、瀟灑にして端麗、舉止甚だ閑雅にして而も無限の愛嬌を有す、所謂玲瓏玉の如しとは夫人のとにてあるなり、

所謂胎蕩春風の如しとは、また誠に夫人の謂なり、一たび夫人に接す、恍惚人をして離るゝに忍びざらしめ再び夫人を見る、濶容人をして忘るゝ能はざらしむ。

(以下次號)



文苑

システイーとドミノー

安井てつ子

英吉利の或市に、三階造りの大層立派な家がありました。其家には、廣い奇麗な庭がありまして、梅だの林檎だの、其外、色々の木が植えてあります。

此家は、システイーといふ男兒の家です。或夏のことでしたが、餘り暑いので、システイーの

父親は、ぢき窓の下の木陰に、腰を掛けて、本を讀んで居ました。

すると、不意に頭の上で、ガチャンと大きな音がして、間もなく、綺麗な瀬戸物の碎片が、足のまわりに飛んで來ました。

けれども、此父親は、一生懸命に本を讀んで居ましたから、別に驚きもしませんでした。

「おや、おや、誰がまあこんな事をしたのだらう。

まあ、私のわんなに大切に居た此綺麗な植木鉢を、……………」

プリミンス、プリミンス、早く」とシステイーの母親が、大きな聲で呼びました。

プリミンスは、システイーの大變、好きな姿ですが今、奥様に忙しく呼び立てられて、はあ、はあ、呼吸をつきながら、眞青になつてとんで來ました。

「これ御覽、プリミンス、

あの窓の綺麗な花を、皆、棄て、しまつた方がまだましだ。そうでなければ、あの大切なお茶道具でも皆こわしてしまつた方がまだい。

わんなに丹精して去年から育てた此薔薇をまあ、こんなにするとはなげけない。

又、此、植木鉢は私の誕生日の御祝に、つい此間旦那様から戴いた大切なものだけに。

屹度あの悪戯兒のシステイーが、したのにちがひないよ。」

婆は平生から、大層旦那様をこわがつて居ましたから、此時そつと横目で其方を見ますと、丁度、御主人と顔を見合はせました。

婆はあわて、

「さ、奥様、それは坊様がなすつたのでは御座り

「ません、私で御座ります。」

と恐る／＼申譯をしますと

「おまへが、まあ、なんとそゝつかしい、

これは私の大切な植木鉢だと云ふことをよく知つて

居るではないか、

おゝ、プリミンス、何といふことだね。」と強く叱ら

れて婆は泣きそうになりました。

「そんな虚言をいふものではないよ、婆」と云ながら

此騒ぎを聞いてシステイーは其處にかけ出して來まし

た。

「母様、そんなに叱るのはおよしなさい、それをした

のは婆ではありませんよ、僕なのです」

婆は唯喫驚して、此兒の顔を見つめて居ましたが、此

時御主人は静々と其側にあるいて來てじつと様子を見

てゐらつしやるので、婆はなほ／＼うろたへ、ぶる／＼

ぶるへながら、

「まあ、まあ、奥様、しかし若しも坊様がなすつたの

なら全くついで御座ります、坊様はさつき、お窓の

側に立つてゐらつしやいましたから全く／＼に違

ひ御座りません。

ねえ、そうでせう、坊様

しつかりお答をなさいましよ」と云ひながら急に聲

を低くして、

「おつしやらぬと父様に叱られますよ」

此時までシステイーのお母親はちつと其子を見つめ

て居ましたが、

「まあ、屹度そうだらう、決して態としたのではある

まい、これから能く氣をお付けなさい、そんなにこ

わがらなくともいゝ、まあ此處に御出で」

と抱きよせやうとしますと、

「さ、え、母様、そんなにやさしくして下さるな、僕は
は慥と植木鉢を押したのです。」

「ひう、なせ」と云ひながら此時システイーの父親は
すつと子供の側に寄つて來ました。

婆は何事が初るかと思つてびく／＼心配しながら男兒
の方を見つめて居ます。

「じやうだんに、どんなに父親がびつくりなさるか
と思つてじやうだんにしたのです。

本當ですよ、正直の事ですよ、さあ父親、僕を打つ
なり、どうなりして頂戴、さあ……………」

どシステイーは涙ぐみながら父親の側に寄て來ました
父親は持つて居た本をあつちに投げ出して、少しこ

とみながらシステイーを確どつかまへました。

「システイー、お前は本當に悪い事をした、

しかし能く、こわさも忘れて、本當の事をいつた、

システイー、お前の父親はかういふ正直な子を持つ
た事を誠に嬉しいと思ひます。

どうかお前も能く此父親の心を考へて、一生忘れぬ
様になさい、そして今日の過はいつか屹度償はなけ
ればなりません。」

ど云ひながら堅くシステイーを抱き占めました、
やがて婆の方を向いて言葉強く、

「プリミンス、君、此次に再かう云ふ様な虚言を私の
子に教へる事があつたならば其時こそ直ぐに暇をや
る、そして其時からもう決してお前にあはぬから
其積りでおいで。」

無心の感化

東 条 子

波風のあらし、此世の旅路をたどり盡して、今はは